

新島伝にひそむ七つのウィルス

奨励	北垣 宗治〔きたがき・むねはる〕
奨励者紹介	同志社大学名誉教授 敬和学園大学元学長

同志社は新島襄が中心となって、一八七五（明治八）年に立ち上げた学校です。創立以来百三十五年間続いてきた日本有数のキリスト教学校です。同志社スピリットとは新島スピリットのことである、と言って差し支えありません。このことは、同志社では当然のことと考えられておりまして、誰も異論を唱えません。同様に慶応義塾には福沢スピリットがあり、早稲田には大隈スピリットがあるのでしょう。

同志社創立の中心人物である新島襄は伝記運にめぐまれた人です。お配りした「新島襄の伝記」リスト（この講演記録の末尾に掲げておきます）は、これまでに出版された新島襄に関する主な伝記を示しています。AからRまで、十八冊挙げましたが、新島に関する完全な伝記は存在しません。どの伝記にも何かの欠点、間違い、ないし不正確な点があります。比較的信頼できるものを三冊推薦するすれば、私はBとMとPを挙げたいと思います。B（A・S・ハーディー）は新島をして新島を語らせるという方針を取っていますし、新島の英語の手紙を豊富に引用していますので、新島の全貌を理解するには最も適切です。M（和田洋一）はいわゆる新島神話を打破するという立場から書かれた伝記で、よく書けていますが、ときどきまちがいが見出せます。P（本井康博）は『新島襄全集』全十巻が出版されてから、大学生用の教科書として書かれたもので、最も正確ですが、頁数の制限からきわめて圧縮された伝記です。このPにすら若干の不正確さがあります。（なおNの『小説 新島襄』は、表題で「小説」とことわっていますが、それでも伝記に限りなく近い力作であるため、敢えてこのリストに加えました。）

さて私は比較的若いことから、毎年新島懸賞論文の審査委員を務めてきました。これは同志社の外郭団体の一つであった「新島研究会」が一九七〇年代から主催してきた行事でありまして、現在では社史資料センターの第一研究部門、すなわち新島襄研究を続けているグループの何人かが懸賞論文の審査を引き受けています。この懸賞論文には毎年、同志社内の中学校、高等学校、女子中高、香里中高、国際中高の生徒たちが応募してきますが、中高生だけでなく同志社大学、同志社女子大学、そして大学院の学生さんにも応募の機会を与えています。ですから皆さんも、我こそと思う人はこの懸賞論文に応募されるとよろしいでしょう。これは、いうなれば、同志社スピリットを体得するための絶好の機会になる筈です。

今日私は「新島伝にひそむ七つのウィルス」という奇妙な題を掲げました。その題の意味を初めに説明しておきたいと思います。新島襄の伝記は私のリストが示すように、沢山あるのですが、これらを読んでみようと面白いことに、間違った情報が伝記から伝記へと伝わっていく現象が見られます。それはあたかもウィルスのようなもので、ほっておくと更に次の世代にまで伝わっていく可能性があるので、新島襄の実像に迫るためにはこうした病原菌をできるだけ退治する必要があると私は考えています。これまでの新島襄の伝記には数多くのウィルスが存在しますが、私は今日そのうちの、顕著なウィルスを七つ指摘してみたいと考えます。

一、一字一句を おろそかにせず

中学生たちが書いた新島懸賞論文を読んでいて、若い頃の新島七五三太（新島襄の子供の頃の名前は「しめた」というユニークな名前でした）の勉強態度に、ひどく感心することに気づきました。それは中学生たちがH（岡本清一）を読んでいて、その中で、次のような文章に出くわしたからです。

七五三太はよくできた。その勉強方法は、一字一句もおろそかにしないで、よくわかるまで先へ進まない、というやり方だった。ですから時には、一句の意味を理解するのに、三日もかかる、というほどだったが、それは煉瓦を一つ一つ、積み重ねていくように、知識のゆるがない集積ができ上るのである。（p.19）

そして新島のこの勉強方法のことは、J（神田哲雄）にも出てきます。新島自身は自分の若い頃の勉強方法は一字一句おろそかにしなかった、などと、どこにも書き残していません。そこで調べてみると、E（根岸橋三郎）にその源があることがわかります。この根岸は新島の先祖の地である群馬県安中の人で、日本人として新島の伝記を書いた最初の人です。というのは、新島の伝記は新島の永眠した一八九〇年にA、翌一八九一年にB、そして一八九四年にC、という風に、十九世紀のうちに先ず英語のものが出ていることに大きな特色があります。すなわちAの著者J・D・デヴィスはアメリカン・ボードの宣教師で、新島の同僚でした。次にBの著者は、新島のアメリカの大恩人であるハーディーの息子です。ところで根岸の新島伝は面白いのですが、不正確であり、間違いがいっぱいあります。ですから、私が一九四七年に旧制の同志社大学予科に入学して、予科長の山田貞夫先生から「修身」の時間に新島襄の伝記を教わったとき、根岸の本は読まない方がいいと、警告されたほどでした。

その根岸橋三郎は、このように書いています。
飯田君が当時の次ぎの如き感想を私に話しました。「新島さんは頭腦が明晰で、一字一句苟（いやし）くもせず、文章の意味を詳細に了解する質ですから、時に由ると一章句の研究に数日を費すと云ふ勉強法で、弟の雙（そう）六君の一瀉千里に片付けるのとは大変な違ひです。」（p.72）

ここで「飯田君」というのは飯田逸之助のことで、安中藩の目付け役として、若いころの新島のことを知っていました。彼は新島の密出国に理解を示した人でもあります。ですから郷里の偉人新島襄の伝記を書こうとした根岸は、新島の死後まだ存命中だった飯田に直接会って、新島の少年時代のことをいろいろと尋ねたと考えられます。飯田が根岸に向かって「新島君は一字一句おろそかにしなかった」と、本当に語ったかどうか、それを確かめるすべはありません。しかし私は英語の教師として、またテキストの読解を仕事とする者として、この「一字一句了解主義」はまやかしであると考えます。つまり、難しい単語や難しい表現に出くわしたなら、それがわかるまで先に進まないというのは実は愚かな方法なのです。難解な箇所に出くわしたならば、その先まで進み、後を読み返し、その前後から攻めていくのです。すなわち難解な箇所は文脈から攻めていき、全体から部分を理解する、というのが正当な方法です。或る一字、一句がわからないから、その先には進めない、のではなく、その先に進んでみて、または引返してみて、分らない字句を理解していくのです。これが人文学の方法なのであって、このことは「漢学」においてもあてはまると私は確信しています。だとすれば、なぜ飯田のような発言になるのでしょうか。またなぜこの「一章句の研究に数日を費す」という間違った勉強法に、中学生たちがあれほど感心したのでしょうか。私にはわかりません。

二、一枝を折る者は 一指を斬る

新島懸賞論文を読んでいて、複数の中学生・高校生が感動するもう一つのエピソードがあります。それは若いころの新島七五三太が友人たちと王子の方に花見に行った時のことです。そこに立て札があり、「一枝（いっし）を折る者は一指（いっし）を斬る」と書いてありました。新島七五三太はこの立て札を見て怒り、桜の枝をめちゃくちゃに叩き切ったというエピソードです。H（岡本清一）は一九四八年の『新島襄』の初版にそのエピソードを載せていませんが、私の所有する一九七五年の改定四版を見ますと、このエピソードを書き足しています。それをN（真下五一）も踏襲しています。ではどこからこの話は伝わったのでしょうか。それは『新島研究』一九号（一九五九、七、三〇）のp.30に掲載された、新島八重夫人の談話に出てきます。少し長いですが、引用してみましょう。

襄が若い時代には、ある時友人と王子のほうに桜見に参ったことがあります。ところが、そこに桜一枝折れば一指をきるという意味の高札が立ててございました。襄はこれを見たとなんに、刀を引きぬいて、そこにあった桜の枝をきったので、桜見に来ていた人々は、酔いどれがあばれるのだらうと、危険を感じたものか、みんなでおそれ逃げたそうであります。ところが、その逃げるのが面白くて、大分桜の枝をきったということであります。しかし、若いころのことで、そのようなことは、自分もすっかり忘れておりました。それから後年になって、同志社大学の設立主意書を新聞に発表しましたとき、昔の塾友であった多田野信とかいう人から、一通の手紙がきまして、大学発表の主意書によれば、新島襄とあるが、貴君の旧名は、あるいは新島七五三太と申されるのではあるまいかお尋ねする、と書いてありましたので、襄は早速その人のところに、久し振りに返事をしたため、たしか自分は七五三太であるが、現在は襄に改めていると申してやりました。すると、その多田野という人から、こんどは一枚の写真を送ってきました。そうしてその裏面に、王子の旧遊君は記憶しているか否、といったようなことが書いてありました。その昔王子に桜見にいっしょに行った塾友であったのでございます。襄はその写真をうけとったときに、若い時代に自分が粗暴であったことを、悔いておりました。

この新島夫人の話にどこまで信憑性が置けるでしょうか？ これは実話が神話かの境界線に立つようなエピソードだと私は考えます。もしも新島遺品庫に、多田野信からの手紙と、多田野の写真と、その裏の記述が発見されるのであれば、これは実話です。ところが新島襄全集第九巻、これはつまり新島宛の書簡を集めたものですが、「同志社大学設立の旨意」が発表された一八八八年十一月七日から十二月末までの部分を調べてみても、多田野もしくはそれらしい人からの手紙は入っていません。社史資料センターの小枝さんに多田野の写真があるかどうかを調べてもらいましたが、それらしいものはないということでした。だとすると、どうも新島が刀を抜いて暴れた話は神話と受けとるほうがよいのではないかと、私は思います。H（岡本）は新島が刀を抜いたことにしないで、その「立札を、ぬきずるとともに、はげしい怒をこめて、さくらの枝をめちゃくちゃに、たたき折ってしまった」（一九七五年版、p.21）としています。岡本の七五三太は刀を抜いていません。N（真下）の七五三太もまた刀を抜かず、「その立札を抜きとって足蹴に踏みつぶしてしまった」（p.50）としています。このように刀を抜いて、狂ったように乱暴狼藉を働いたとするのは、新島八重夫人だけなのです。

三、テイラー船長は 熱心なクリスチャン

第三のウィルスは、新島を上海からボストンまでワイルド・ローヴァー号に便乗することを許したホラス・テイラー船長を熱心なクリスチャンと見なす考え方です。アメリカ人であるテイラー船長は「ニイシマ」とか、「シメタ」という名前を発音するのが難しいので、「今後、君をジョウと呼ぶ」と宣言した人です。それで新島は死ぬまで自分の名を「ジョウ」で押し通し、氣にいった漢字「襄」をそれに当てたことにしたのです。

少し失礼な発言になるかもしれませんが、クリスチャンでない人が新島の伝記を書く場合には、クリスチャンとキリスト教を買いかぶる傾向が現われることがよくある、というのが私の意見です。N（真下五一）を読んでみて、私は真下がクリスチャンでないことを直感しました。それはクリスチャンであれば犯す筈のないような間違いが出てくるからです。たとい誰かが、真下が洗礼を受けたクリスチャンであることを証明されたとしても、私は真下が教会生活をしたことのない人であると主張いたします。その理由は、真下がクリスチャンのことを繰り返し「神の御子」または「神の子」と表現するからです。「神の御子」といいますと、クリスチャンは天地万物の創造者たる神の独り子、イエス・キリストのことだと理解

します。一般のクリスチャンを「神の子」と呼ぶことは間違いとは言えません。すべての人は神によって創られたのですから、人間はすべて神の子であります。真下は、クリスチャンは神に属しているということから「神の子」と呼ぶのでしょうか、普通クリスチャンたちは自分のことを「神の子」とは呼びません。ですから、『小説 新島襄』の序章において、登場人物たる住谷悦治元同志社総長が、湯浅八郎元同志社総長と一緒に安中を訪問した時、親切に二人を車にのせて案内してくれた人が、新島の両親がかつて住んでいた家の隣にあった家の、現在の持主であることがわかったときの住谷総長の次のようなセリフに、私は違和感を覚えます。「これはまた何と珍しい、何という幸運でしょう。偶然に道を尋ねたその御一家が同じ新島先生の神の子で、道に迷っている吾々を助けて下さるなんて・・・」(p.8 私の傍線)。

次にご紹介するのは、同じく真下の『小説 新島襄』で、新島自身が、同志社英学校の第一回の卒業式で冒頭に述べる言葉でありまして、私はこれにも大きな違和感を覚えます。真下の新島はこうに言います。「卒業式は卒業生のものであらねばなりません。それなのに学校側が威圧で形をととのえようとするなどは全くもって主客転倒のやり方というものでしょう。ですから他の学校のことは知りませんが、吾が同志社英学校におきましては、神の御子を送り出す心でこの式をはじめたいものだと思います」(p.328 私の傍線)。この場合、「神の御子」は、神によって創られた、神に仕える若者たち、といった意味でしょうが、それにしてもこれは不自然な表現です。

もう一つ真下から。山本覺馬と、新島八重の母に当る山本佐久は同志社女学校の舎監となった時、自分の婿である新島襄に洗礼を受けたいと申し出ます。その場面を真下はこうに記述しています。「『どうぞわたしにも、先生の手で洗礼を・・・』と、自ら佐久は襄に申し出て、襄の手でおそかに神の御子となったのであった」(p.317 私の傍線)。

次是新島の大恩人であるボストンのクリスチャン実業家アルフィー・ハーディーをめぐる話です。ハーディーはアメリカン・ボードとも深く関係し、その最高審議委員会の議長を務めた人であり、同志社英学校がアメリカン・ボードの庇護のもとに誕生するきっかけを作ったということが出来ます。真下はこのハーディーを非常に影響力の強いクリスチャンに仕上げてしまいました。ワイルド・ローヴァー号のティラー船長のキリスト教信仰はハーディーの影響であるとし、事もあろうに新島七五三太を箱館から上海まで運んだベルリン号のセイヴォーリー船長の信仰もまたハーディーの影響によるものだとしています。そのため、セイヴォーリーもまたティラーと同じくチャタムの出身ということになっています。それはあり得ないことです。セイヴォーリーはアメリカ史上、魔女裁判で有名なセイラムの出身であり、ハーディーに雇われたことは一切ありません。

次にご紹介するのは、ワイルド・ローヴァー号がボストンに着いた時、ティラー船長が新島に、やがてハーディー氏が君のことを引き受けてくれるよ、と告げる場面です。真下のティラー船長が言います。

「それにね、この世話して下さる人はね、まんざら君に縁がないでもない方なんだよ。このワイルド・ローヴァー号の持ち主のことは、そら、いつか君に話して聞かせたことがあったろう。そのアルヒュース・ハーディーさんが、つまり君を引きとって下さることになったんだよ」(p.173)

慎重な実業家であるハーディーがまだそのように決めたわけでもありませんのに、真下の描くティラー船長はもうそんなことを新島に請け合っているのです。これに対して新島はこう答えます。

「ああ、そのハーディーさん！ 熱心なクリスチャンで、その感化でティラー船長もクリスチャンになられたという。・・・」
「そうそう、その人だ。ハーディーさんから感化を受けた者は何もこのおれだけのことでなくて大勢いるんだよ。ほらセイヴォーリーも船長を一つ首になったって、それが人のためにつくって受けた仕打ちなら、少しも悲しむことはしないんだよ。きっと神がいや、ハーディーさんが拾って下さるだろうからね。それほどハーディーさんの胸は広くて大きいんだから、君もきっと安心していいよ」(p.173)

真下の描くワイルド・ローヴァー号には、キリスト教信仰の雰囲気が備わっています。真下はこうに描写します。

海の怒る日には全員が丸となってティラー船長の指図通りに実に機敏に身をこなす。それは陸にある人の誰にも想像できないほど信頼と統制のとれたものであった。・・・
ジョーは期せずして、その姿に聖書の節々を目のあたりに見ている思いがするのであった。そういえばティラー船長以下も殆んどがクリスチャンだったようである。初めはそうでなかったのであろうが、船長の感化だったのであろう。・・・

また海には風ざの日もある。これが大洋のただ中かと疑うほどに、静かな鏡の上をすべるように行く時もある。そんな折りのたのしさはまた海上ならではの格別のものである。
ローヴァー号でも先のベルリン号の時と同様に、そうした折りには船員たちはのんびりと羽根を休め、そして聖書を読むことが多かった。トランプ等に興ずることもあるが、陸に上ると荒っぽくなりやすい海の男たちも、海上では全く人が変わったみたいにみえるのであった。(p.164)

真下の描くワイルド・ローヴァー号は、まさにキリスト教的ムートピアではありませんか。そんな船が本来にあるなら、乗ってみたいものです。事実はどうであったでしょうか。ティラー船長はジョウに向かって、船首部を居住区域とする船員たちと付き合ってはいけなと、固く交流を禁じたのでした。それはジョウのような純真な青年を付き合わせるには、度し難いほど荒くれた船員たちだったからです。「静かな鏡の上をすべるように行く時もある」と書いてありましたが、ワイルド・ローヴァー号が帆船であって、風で動く船であるということを真下は忘れています。

ティラー船長を敬虔なクリスチャンと見なしたのは真下だけではありません。私の尊敬する河野仁昭氏ですら、同じ傾向を示しています。リストのO(河野仁昭)は『新島襄全集』全十巻が刊行されてから書かれたすぐれた伝記ですが、河野氏はベルリン号のセイヴォーリー船長のことをこのように書いています。「船長はときおり英語の聖書を読んでいることがあった。それがキリスト教の聖書であること、ニコライとの生活によってわかっている。人に対して優しくするようキリスト教徒は聖書によって教えられているのかもしれない。ニコライもそうだった。その聖書のことを教えて下さいと七五三太は頼んでみたこともあったが、船長はまるで恥ずかしいところでも見られたかのように、『まあ、そのうちにな』といって、ぱたんと聖書を閉じてしまうのだった」(pp.119-20)。

河野氏はティラー船長については次のように書いています。「ティラー船長は朝夕聖書を読み、お祈りをしていた。英語や聖書についての新島の質問にも、丁寧にこたえてくれたし、船の測量方法や観測機器の扱い方を手にとって教えてくれたので、測量技術は担当の船員の代理がとまるほど向上した。航海日誌の付け方も教えられた。ティラーの親切心はやはり聖書の教えによるものだと、新島は信じた。セイヴォーリー以上にこまやかに面倒をみしてくれるのは、セイヴォーリー以上に熱心に聖書を読んでいるからにちがいないと思われた」(pp.127-28)。

河野氏はこのように、セイヴォーリーとティラーの親切心の度合いは聖書をどれだけ読んでいるかに正比例するかのように述べています。しかしこれらはすべて想像の産物にすぎません。ティラー船長は一八六九年十二月にボストンの埠頭で事故死しました。真下はこのときのことを、突堤と船の間に落ちた少年を救おうとして、ティラーが代りに自分の命を捧げたのだとしています(p.210)。このように、ティラーはあくまで崇高なクリスチャンであったと真下は言うのですが、実際はどうだったのでしょうか。

アーモスト大学の四年生だった新島は、船長の事故死の電報を受取るとすぐ、汽車に乗ってボストンへ行き、ティラー一家にかけつけます。新島は言葉にならないほどの深い悲しみに襲われました。その時新島の心を更に一層悲しくさせたことは、ティラー一家の人びとがクリスチャンらしくない仕方で振舞っていたことでした。具体的にそれがどういう状態であったのか、はっきりしませんが、ティラー一家の遺族たちには、福音によって救われた人びとの感覚が欠如していることを新島は強く感じました。それに、ティラー船長とは、生前に一度も聖書や信仰について話したことがない、ということも思い出しました。そこで、新島はティラー一家の遺族にあてて、救い主イエス・キリストを受け入れなさいと痛切に奨める手紙を書きました。その手紙は『新島襄全集』の第六巻(pp.61-64)に入っていますが、新島襄の福音主義がこれほどストレートに、激しく表明された文章は外に見当たりません。

四. 黒田清隆と寺島宗則

新島襄の伝記にひそむ第四のウィルスは固有名詞にかかわるものです。一八六七年十一月下旬のある日のこと、二人の日本人がアーモスト大学まで新島をたずねてやってきました。新島は大喜びしてこの二人を大学の体育館や動物・鉱物標本の陳列室に案内してまわったことを、友人宛の手紙で報告しています。新島は彼らにキリスト教の話もしています。彼らは新島にお祈りしてほしいと頼んだので、英語で祈りをささげたことも書いています。これは新島がアーモスト大学に入学してまだ三か月しかたっていない頃の話です。彼らはアーモストの南の方にあるモンソン(Monson) という村のアカデミーに留学している薩摩藩の留学生でした。薩摩からの留学生たちは幕府にばれるとまずいので、すべて偽名を使っていた。二人の薩摩人が誰であったのかを新島は記していません。その一人をF(湯浅与三)は大胆にも黒田清隆であったと断定しています(p.173)。黒田はのち明治政府に入り、帝国憲法が発布されたとき内閣総理大臣だった人です。そしてH(岡本)は広島図書から出た一九四八年の新島伝で、黒田説を踏襲しています(p.109)。そして真下がやはり黒田説を採用しているのです。しかし黒田の研究が進み、彼がモンソンに留学したことがないことが明らかになりました。これなどは新島伝にひそむ典型的なウィルスの一例ですが、幸い、現在では消滅しています。岡本自身、のちの改訂版で、その時の薩摩人二人は種子島綱輔と吉田彦麿だったと訂正しています(一九七五年版、pp.116-17)。岡本が黒田説を捨てたことはよろしいのですが、吉田彦麿というのは種子島綱輔の用いた偽名であることを見抜けませんでした。私自身はこの時の二人の薩摩人は吉田彦麿を名乗る種子島綱輔と、大原令之助を名乗る吉原重俊であったと推測します。吉原は後に日本銀行総裁になった人です。

もう一つのウィルスは、明治政府の外務卿を務めた寺島宗則に関するものです。寺島もやはり薩摩出身ですが、新島伝ではこの人がしばしば岩倉使節団の一員に挙げられているのです。寺島が岩倉使節団の一員だったことはありません。したがって新島と交流があった明治政府高官の一人とは考えられません。そもそも寺島はキリスト教嫌いであり、同志社に対して好意的ではありませんでした。寺島を岩倉使節団に加えることを最初にやったのは、どうもA(デイヴィス)らしいのです。そのためB(ハーディー)もまた同じ誤りを犯し、それがJ(神田哲雄)、K(加藤延雄)などにも伝わってしまいました。

五. 日本伝道部の 番外通信員

次にご紹介する五番目のウィルスは、さいわい死に絶えたもので、復活することはちょっと考えられません。新島襄は一八七四年の秋、十年間のアメリカ留学を終えて帰国するわけですが、志願してアメリカン・ボードという宣教団体の宣教師となりました。祖国日本への宣教師というわけです。宣教師としての彼は、英語ではcorresponding member of Japan Mission と呼ばれました。これを明治から大正、昭和初期にかけて、最もよく出来た新島伝と考えられていたD(デイヴィス著、山本美越乃訳)は「日本伝道部の(番外)通信員」と訳しました。それを『同志社五十年史』において中瀬古六郎が踏襲し(p.40)、爾来「番外通信員」という訳語はF(湯浅)、G(森中章光)、L(渡辺実)、M(和田)まで受け継がれました。きわめてしびるとい典型的なウィルスの例です。I(魚木忠一)がはじめて「日本ミッションに於ける宣教師待遇者或は準会員」と正しく訳しました。現在では「準宣教師」という訳語でほぼ統一されており、新島は「番外通信員」という奇妙な役割から解放されました。

六. アーモスト大学は アーモスト・ アカデミーの後身

これはアーモスト大学の初期の歴史の誤解に基づくウィルスです。F（湯浅）はアーモスト大学について、「此大学は一八二一年同じ場所に在ったアマースト中学が昇格せられたもので、その後四年経って正式に設立認可を得た」（p.166）と述べています。これをH（岡本）（一九七五年改定四版、p.110）や、L（渡辺）が踏襲して、「アーモスト中学が昇格」（p.63）したものであるとしています。これははっきり間違いです。Amherst Academy（アーモスト中学）は、大学の建てられた場所とは別の場所にありました。アカデミーは男女共学、大学は創立以来一九七五年まで男子校でした。しかしアーモスト・アカデミーの理事会がアーモスト大学を作ったのです。アカデミーの教師の一人だったJoseph Estabrook が新設のアーモスト大学のギリシア語・ラテン語の教授に任命されました。アーモスト大学はアーモスト・アカデミーが昇格してできたものではなかったのであります。

七. 日本の教育制度への新島の莫大な貢献

最後に七番目の微妙なウィルスについてお話ししておきましょう。それは新島襄が明治初期に始まった日本の教育制度に、莫大な貢献をした、という考え方です。実はこれはタチの悪いウィルスなのです。というのは、そのウィルスの発生源は新島のアメリカの大恩人であるアルフィアス・ハーディーその人であるからです。新島襄の生涯で最も光輝いた一日を選ばなければ、それは一八七四年十月九日ということになります。この日に彼はヴァーモント州ラットランドで開催されたアメリカン・ボードの第六十五回年次大会の最終日に、日本に向かう新任の宣教師として、聴衆に向かって資金アピールの演説を行い、大成功を収めました。新島はただ慣例に従って出発の挨拶をすることを求められただけでしなのに、彼はお別れの挨拶をする代わりに、日本に帰ったらキリスト教の教師を養成する学校を作りたい、そのためには資金を必要とする、日本では資金を集めることができない、ぜひ皆さんの絶大なるご支援をお願いしたい、という趣旨の、型破りの演説をし、その場で五千ドルの約束を得たのであります。この輝かしい出来事が起こる直前に、新島を聴衆に紹介したのはハーディーでした。ハーディーはこのように言いました。「こんにち、彼の祖国が採用した教育制度が実施にうつされていますのは、まさしくこの若い日本人のおかげなのです」（『同志社百年史』通史編、p.18）。父親からそのように聞かされていたとみえて、息子のアーサーも『新島襄の生涯と手紙』の中で同趣旨のことを述べています。「帰国後に文部大輔に任じられた田中〔不二麿〕氏が現在の日本の教育制度の基礎をおいたのは新島襄の報告書にもとづいてのことであった」（『新島襄全集』10:133）。

岩倉使節団の一員だった田中不二麿文部理事官は、新島を通訳兼案内役として、アメリカとヨーロッパ諸国の教育施設・制度を視察してまわり、帰国後にその報告書である『理事功程』十五巻を刊行しました。新島はこの『理事功程』のために欧米の教育施設や制度についていくつかの翻訳を、田中と別れてドイツに滞在中にいたしました。ここで注意しなくてはならないことは、『理事功程』があくまで報告書であって、決して日本の教育制度の青写真を示したものではないということです。ハーディー父子の好意的な誤解は、報告書を日本の教育制度のロードマップと取り違えたことにあったと私は見えています。

一九八〇年代まで新島研究家として自他ともに許す第一人者であった森中章光は、もちろんGの伝記を書いた人ですが、この森中は新島の遺品として同志社に残っていた「独逸の公学校に関する草稿」を『理事功程』第九巻と比較検討し、「その内容は全く同一であるといっても差支ない。中には数字の計算間違いまでも其儘である。」（『新島襄先生の生涯、海外修学篇』、p.350）と述べています。新島の草稿の中にある計算の間違いがそのまま『理事功程』に印刷されているとすれば、新島の草稿がそのまま印刷に付された部分があることに疑いの余地はありません。I（魚木）は『理事功程』十五巻に関して「そのうちの最も重要な部分が新島の筆と苦心になったものであることは疑いない」（p.63）と述べています。ではその「最も重要な部分」とはどの部分を指すのか明らかではありませんが、これは湯浅、森中の線上的発言と受け取ることができます。J（神田）もその線に沿って、『理事功程』の「大部分は、新島襄の手になるものである」（p.90）と述べています。

それまでのどの伝記以上に、日本の教育制度に対する新島の貢献を高く評価するのはL（渡辺）です。『理事功程』十五巻ではアメリカとドイツの教育制度を最も詳述している（十五巻中アメリカに二巻、ドイツには四巻を割り当てています）ことを指摘した上で、『理事功程』は「わが国の教育制度を整備する上の貴重な資料となったものであり、この原稿が新島によって執筆整備されたことを思うとき、明治の教育整備のために演じた新島の業績は、高く評価されなければなるまい」（p.90）と書いています。

現在新島研究で第一人者である本井康博教授は、Pの中で、ほぼ渡辺と同じ趣旨の評価をしています。「新島がベルリンでとりまとめた視察報告書の草稿は、後に文部省から出版された『理事功程』全十五巻のベースになった。これはかなり周知のことであるが、同書が日本の教育制度に果たした役割を考慮に入ると、新島は神学生ながら日本の教育行政に貴重な一石を投じる貢献を果たしたことになる」（p.53）。

『理事功程』に対する新島の貢献という点で、最も冷めた見方をしているのはO（河野）です。河野氏はその中でこう書いています。「彼〔新島〕の苦心の草稿のうち、教育と教会に関する部分は、文部省の刊本『理事功程』ではほぼ全面的に削除され、イギリスの教会に関する調査報告草稿『大ブリタン寺院のリポート』は、ついに日の目をみずじまいになった」（p.241）。さらに河野氏は『新島襄全集』第一巻解題の中で、「アメリカに関する草稿などはあっても不思議はないように思われるが、同志社の収蔵史料には見当たらない」と言っています（『新島襄全集』1:651）。

河野氏の冷めた見方を更に一歩進めた見解を出しているのはQ（太田雄三）です。太田氏は、『理事功程』は、新島が「彼自身の見解を述べた意見書ではなく、学校規則とか他人の筆に余る報告書の単なる翻訳に過ぎない」（p.169）ことを指摘します。そして新島がドイツのヴィースバーデン滞在中にアンドーヴァーのミス・ヒドン宛に書いた一八七三年六月二十五日付けの英文の手紙を引用しています。“Since May of last year I had been constantly travelling with our Commissioner until the first part of last September. From that time till last January I was staying in Berlin and engaging to translation for Mr. Tanaka, our Commissioner. It was a most tedious uninteresting work I ever had undertaken”（『新島襄全集』6:129）。最後のセンテンスの中の「私がこれまでやった仕事の中で、最も退屈で面白くない仕事」という表現は決定的です。私自身は『理事功程』に対する新島の貢献という事に限って言えば、河野氏、太田氏の見解に傾いています。太田氏が指摘する通り、「日本の学校制度に関する重要な基本法令である学制」は一八七二年九月五日に頒布されたものであり、この頃田中と新島はデンマークからベルリンに帰るところでありました。ハーディー父子は「学制」のことを何一つ知りませんでしたから、日本の教育制度の出発は新島の案に基づいていたのだとする、身びいき的な、好意的なウィルスを生み出してしまったのであります。

同志社大学卒業生である大越哲仁氏の「『理事功程』と新島襄」（『新島研究』九四号〔二〇〇三〕）という論文は、私の今出している問題を精緻に論じたもので、「新島が『理事功程』の主要な草稿執筆者であると考えてほぼ間違いない」という結論を出しています。しかし、それでは、『理事功程』は明治初期の教育にどのような影響を与えたのか、という問題になると、これは一朝一夕に回答を出せる問題ではありません。ただし、このセクションの最初に述べたハーディー父子の考え方は、依然として買いかぶりの発言であり、ウィルスに発展する可能性を秘めている、と私は考えます。

以上、新島伝にひそむウィルスを論じてきました。見事削除されたウィルスもあれば、これからウィルスに発展するかもしれない微妙な、ウィルスの卵のようなものもあることを指摘しました。ウィルスだと分ったものを努めて駆除しつつ、さらに正確に、新島襄の実像に迫っていきたいという私の念願を申し上げて、この講演を終わらせて頂きます。ご清聴有難うございました。

参考資料

新島襄の伝記

（新島の誕生、江戸での幼、少、青年期、留学、同志社時代から永眠までをカバーするもので、書物として出版されているものをを中心に編集した。）
A Jerome Dean Davis, A Sketch of the Life of Rev. Joseph Hardy Neesima (Tokyo: Maruzen, November 1890) [村田勤・松浦政泰訳『新島襄先生伝』（東京：警醒社、Jan. 1891）]
B Arthur Sherburne Hardy, Life and Letters of Joseph Hardy Neesima (Boston: Houghton Mifflin, 1891) [北垣宗治訳『新島襄の生涯と手紙』（新島襄全集第十巻、京都：同朋舎、1985）]
C Jerome Dean Davis, A Maker of New Japan: Rev. Joseph Hardy Neesima (New York: Fleming H. Revell, 1894) [A の改訂増補版。北垣宗治訳『新島襄の生涯』（京都：同志社校友会、1975；東京：小学館、1977；京都：同志社大学出版部、1992）]
D 山本美越乃訳『新島襄先生伝』（東京：警醒社、1903）[A の訳、B をも取り入れた補正新島伝にひそむ七つのウィルス再版]
E 根岸橋三郎『新島襄』（東京：警醒社、1923）
F 湯浅与三『新島襄伝』（東京：改造社、1936）
G 森中章光『新島襄先生の生涯』（東京：泰山房、1942）
H 岡本清一『新島襄』（広島：広島図書、1948）
I 魚木忠一『新島襄一人と思想』（京都：同志社大学出版部、1950）
J 神田哲雄『新島襄の生涯』（東京：社会教育者連盟、1955）
K 加藤延雄『新島襄先生略伝』（京都：日本観光美術出版社、1956）
L 渡辺実『新島襄』（東京：吉川弘文館、1959）
M 和田洋一『新島襄』（東京：日本基督教団出版局、1973）
N 真下五一『小説 新島襄』（前橋：上毛新聞出版局、1977）
O 河野仁昭『新島襄の青春』（京都：同朋舎、1998）
P 本井康博『新島襄と建学精神』（京都：同志社大学出版部、Apr. 1, 2005）
Q 太田雄三『新島襄』（京都：ミネルヴァ書房、Apr. 10, 2005）
R 『新島襄への扉』編集委員会『新島襄への扉』（東京：日本キリスト教団出版局、2006）